

OVERWATCH<sup>®</sup>

WHAT YOU LEFT BEHIND



捨てられた過去 作 ALYSSA WONG

# WHAT YOU LEFT BEHIND



作者

*ALYSSA WONG*

イラストレーション

*ARNOLD TSANG*

バディスト：メディックモデル

*NATHAN BROCK*

バディスト：オリジナルモデル

*HONG-CHAN LIM*

バディスト：オリジナルコンセプト

*BEN ZHANG*

レイアウト & デザイン

*BENJAMIN SCANLON*

日本語版編集

*NOZOMI OSHIMA*





# 捨てられた過去

「深呼吸を」

パティストは声をかけた。診察台に座るデボー夫人は、七十代前半の聡明な女性だ。ビニールスリッパを履き、診察台に腰掛け足を垂らしている。パティストは彼女の背中に聴診器を当て、その呼吸音に耳を澄ました。

「そう、それでいい」

「面白いものでも見つかった？」

デボー夫人は伸びをしながら尋ねた。パティストと目が合うと、片目を瞑って見せた。

「特に変わったことはない。どこも正常だよ」

パティストは聴診器をしまい、診察台から降りる夫人に手を差し出した。今日の彼は診察用の白衣に身を包んでいる。

「検査の結果は一、二週間で分かる。届いたらすぐ連絡するようモンデジール先生に言っておくよ。それとも、甥っ子さんに連絡したほうがいいかい？」

「携帯電話を持ってるから、私に直接知らせてちょうだい」

デボー夫人が再び伸びをすると、手首につけた色鮮やかなバングルがカチャカチャと音を立てた。夫人はパティストの手を取り、診察台からリノリウムの床に降り立った。

「あなたが連絡してくれてもいいのよ。番号を交換しておきましょう」

パティストはデボー夫人を廊下に通し、説明した。

「それが、俺はもうじきここを離れる予定なんだ。経過はモンデジール先生がしっかり診てくれる」  
忙しそうにしている受付係に彼女を預け、パティストは待合室の方へ戻った。

パティストがいる小さな診療所は混雑していた。次々と訪れる患者で、二つしかない診察室は一日中フル稼働だ。原色のイエローに塗られた壁に、空調の音がやかましく響く待合室には、もうじき日も暮れるというのにプラスチック製の椅子に座り順番を待つ患者が数名残っていた。

もう一つの診察室からモンデジール医師がクリップボードを片手に姿を現した。三つ編みを団子にしまとめ、嵐のような忙しさをものともせず落ち着き払っている。彼女は眼鏡の向こうからパティストをちらりと見た。

「デボーさん、どうだった？」

パティストは壁に寄りかかりながら答える。

「健康そうだ。血圧は正常、肺の具合も良好、反射神経にも異常なし。カルテに全部記入しておいたよ」

「電話番号、聞かれなかった？」

パティストは溜め息をもらし、ああ、と告げた。

モンデジール医師はニヤリと笑い、クリップボードを脇に挟み込んだ。

「やっぱりね。で、なんて答えたの？」

「もうじきここを離れることを伝えたよ。経過はモンデジール先生が診てくれる、ってな」

パティストは待合室に視線を戻した。テボー夫人は穏やかな様子で椅子に座り、携帯電話でゲームをしながら甥っ子の迎えを待っている。彼女の向かいには十代の若者たちが座っており、彼らもまた携帯をいじっていた。一緒にゲームをしているのだろうか。

「私にはそれほど素敵な筋肉はついてないから、がっかりさせてしまうわね、ジャン＝パティスト先生」

モンデジール医師はそう言って、パティストの逞しい二の腕をポンポンと軽く叩いた。それからにつきりと笑い、白衣をたなびかせて受付カウンターへと向かった。

「金曜にはもう行ってしまふなんて。久しぶりに長く居られたのに」

二人はポールドペ郊外の児童養護施設で共に育った。その後モンデジールは医学部に進み、パティストはカリブ海連合に入隊した。地域のための診療所を開くことが、二人の子供の頃からの夢だった。パティストはその夢を実現すべく、資金を貯めた。今でも余裕があれば故郷に仕送りをしている。

「一ヶ所に長く留まるわけにはいかないんだ」

タロンに追われている身だから——とは口にしなかった。彼女は事情を理解している。パティストはモンデジールの後続き、受付カウンター奥の本棚の前に立った。ここには診療所の様々な記録が保管されている。電子システムを導入してはいるものの、モンデジール医師には何でも印刷しておく昔気質な面があった。つま先立ちで一番の上の棚に手を伸ばす彼女を見て、パティストは「取ろうか？」と尋ねた。

「それって自慢？」

そう返しながら、彼女は棚から赤いバインダーを抜き取った。背の部分には黒の油性マーカーで年が書かれている。

「この素敵な筋肉を有効活用しようと思ってね」

パティストは軽口で応じた。見ると、彼女は険しい表情でバインダーの中身に目を走らせている。

「何か問題でもあったのか？」

モンデジール医師は満員の待合室を見やり、声を潜めた。

「キャビネットの在庫を確認してきてくれなishら？」

パティストは彼女が見ていた在庫表に視線を落とす。昼に一度確認してみたが、瓶数本のみが入ったプラスチックケースに古いサンプルの箱、そしてがらんとした棚が目についた。あまり好ましい状態とは言えない。

「ああ、いいよ。何が足りないんだ？」



「何もかも」

彼女は小声で答え、バインダーを勢いよく閉じた。それを棚に戻すと、その隣にぎっちりと並べられたフォルダーに目を通し始めた。

「とりあえず今は、現状の在庫一覧が必要な。頼んでもいいかしら……？」

パティストは彼女の肩に手を置き、静かに尋ねた。

「ロズリーヌ、どうした？ 経営がうまく行ってないのか？」

「このご時世だし、厳しいわ。それより問題なのは、サンクレア製薬がどんどん薬の値段をつり上げてることよ。以前だってなんとか賄っていたような状態だったのに、今じゃもう到底手が出せない」

彼女は眉間に深く刻まれた皺に手を当てた。

「こんなの許せない。何が入ってるかもわからない偽造薬を飲んで、合併症になる人まで出てるのよ？ とは言っても、薬を飲まずに苦しみ続けるか、効くかもしれない粗悪品に賭けるか、そのいずれかしかないと言われたら——」

「誰だって偽造薬にすぎる」

パティストは続けた。待合室に目をやり、診察を待つ人々を見る。大事な人たちを助けられないのは、耐えがたい苦しみである。彼は、若いうちにそれを痛感していた。

「俺にできることは？」

モンデジール医師は微笑んだ。その表情からは疲れが滲み出ている。

「魔法の杖でもない限り、何もなさそう。人々の健康が脅かされたって、ヴェルナン・サンクレアみたいな人間は変わらないわ」

「オーバーウォッチがいたら、あんな奴、追い出してくれるのに」

若い受付の男が呟いた。モンデジール医師同様疲れ切った顔をした、せいぜい二十歳ほどの若者だ。診療所はいつから経営難に陥っているのだろうか——パティストは思った。

「オーバーウォッチにしたって、魔法の杖みたいなものでしょ？」

モンデジール医師は素っ気なく言い放った。

すると、壁にもたれていた若者の一人が体を起こして言った。

「オーバーウォッチなら、戻ってきたらしいよ」

その声に彼女の仲間たちも視線を上げる。パティストがいない間に、彼らはずいぶん大きくなっていった。前回ここに来た時はまだ小学生で、そこら中を走り回っていたのを覚えている。四年前、彼がタロンを離れる直前のことだった。

パティストはカウンター越しに前のめりになり声を掛けた。

「そうなのか？ どこでそんなことを聞いた、エステル？」

エステルは肩をすくめ、携帯の画面に視線をやった。

「ネット。ちょっと探せばいろいろ出てくるよ」

「ネットの情報だからって、鵜呑みにするんじゃないぞ」

パティストはそう言って微笑んだが、噂を信じたがるエステルの気持ちが分からないわけではなかった。彼自身も子供の頃、オーバーウォッチに憧れていたからだ。テレビや隊員募集のポスターで見た、世界の平和と人々の命を守る輝かしい英雄たちを、パティスト少年は信じていた。



パティストはそんな存在になりたいと思っていた。だからこそカリブ海連合に入隊し、コンバット・メディックとなったのだ。だが、オーバーウォッチがハイチにやって来ることはなく、組織が解体された頃には、パティストはその夢を静かに諦めていた。人を助ける方法はいくらでもあるし、ポスターに写るなんて気楽なものばかりではないのだ。

「エステル、お前の番だ。診察室Aにおいて」

そう言われたエステルは立ち上がり、ショートパンツのほころいを払った。彼女のバッグのストラップには、油性マーカーでオーバーウォッチのシンボルマークが描かれている。彼女はパティストの視線に気付くとそのマークを手で隠し、そっぽを向いた。



パティストが診療所を出る頃には、すっかり夜になっていた。患者全員の対応が終わるまで残ると申し出た彼に対し、モンデジール医師は「これじゃ私が怠けてるみたいじゃない」と皮肉っぽく返したが、ほうっておけば夜明けまでひとりで働いていただろう。「手伝ってくれるのは助かるわ」とも。

地域の人々のために懸命に働いている時、彼はとても気分が良かった。通りを歩いているうちに、自分は故郷が恋しかったのだという実感が湧いてきた。蝉の羽根が立てるけたたましい鳴き声、まとわりつくような夏の空気、屋台から漂うポークグリオの食欲をそそる匂い…… そのすべてが懐かしかった。タロンを抜けてハイチを離れて以来、パティストは世界各地を転々としてきた。だがいつも気づけばポールドペに戻っていた。

——久しぶりに長く居られたのに。

ずっとここにいたいと思うこともあった。だがそうすれば彼自身だけでなく、ロズリーヌやテボー夫人といった身近な人々も危険に晒すことになる。一ヶ所に長く留まれば、それだけ居場所が特定されやすくなる。もしタロンに見つかってしまったら、彼らは巻き添えも厭わず襲いかかってくるだろう。

「無駄にできる時間なんてないのに、何やってんだ、俺は」

ひとり呟き、彼は星を見上げた。淡い色合いの建物の上に夜空が大きく広がり、わずかに欠けた月が輝いていた。

「せっかくの夜なんだ、楽しもう」

パティストは最上層にしているバーに行くことにした。ルフォールは地元の人気店で、店主のムッシュ・ルフォールとは幼馴染だ。陽気で親しみやすい人柄で、暑い夏の日にはパティストとロズリーヌにパイナップルジュースを振る舞ってくれた。店は地元住民の憩いの場であった。

だがその日は様子がおかしかった。夜だというのに客の姿はほとんどなく、カウンターに二人連れが座っているだけである。一人はタトゥーに覆われた大男で、趣味の悪いアロハシャツにサングラスを装着している。いかにも観光客といった装いだ。黒っぽい髪に白い髪が一筋、稲妻のように走っている。

「これは何て酒だ？」

色鮮やかなカクテルを飲んでいる大男は、カウンターの向こうのルフォールに話しかけていた。ランの花が添えられたカクテルグラスは、大きな手の中でずいぶん小さく見えた。パティストはその手を知っていた。最後にその手を見たのは、生きた人間の喉をコンバットアーマーごと握り潰しているところだった。

「うまいねえ。本当にうまい。なあグエン、お前は思う？」



カウンターにいるもう一人の男が振り返り、肩越しにパティストを一瞥した。こちらは洒落たスーツに身を包んだ細身のベトナム人で、カウンターには彼のパナマ帽が置かれていた。

「遅かったな」

静かに告げたその声は、パティストがかつて、任務報告の度に耳にした声だ。

「わざわざ来た甲斐があればいいな、マウガ」

大男が振り返り、パティストを見てニンマリと笑った。

「よう、相棒」

その一言で、パティストの肌が粟立つ。

「お前、まさか逃げ切れるとも思ったのか？」



四年前――

モンテ・クリスティに到着したのは夜明け頃だった。プロペラで空を切りながら、輸送機が砂浜へと降下していく。機内には、パティストと部隊員たちが鰐詰め状態で座っている。彼の膝上にはライフルが置かれていた。機体の動きと共に体も大きく揺れるが、もはやその振動にも慣れてしまい、心臓の鼓動のようにすら感じられた。

「着陸準備よし」

グエンが告げた。分析官の鋭く冷たい声が、インカムを通してパティストの耳に響く。

「よう、相棒。妙なことを考えてんじゃねえよな？」

マウガがバティストの肩を叩き、ニヤリと笑った。屈むと巨大なボディーマーが軋んで音を立てる。その胸には真っ赤なタロンのマークが描かれている。

「言いにくいこともあるだろうが、俺たちの仲じゃねえか。ほら、いったい何を考えてる？」

バティストは笑いながら答えた。

「お前の頭じゃ理解できんようなことを考えてるのさ」

それを聞いたマウガは笑い出した。

「おい、バカにすんじゃねえぞ。俺だって、シェークスピアばりに高尚なことを考えてんだ」

と言って、自分の額を叩いた。

マウガには“粗野な大男”を演じるきらいがある。だが実際には狡猾で危険な男であり、バティストは彼のそうした面を評価していた。彼らの出会いはタロンへの入隊直後にさかのぼる。バティストはマウガの存在に早い段階から気付いていたのだが、それもそのはずだ。マウガは他のどの新兵よりも背が高く、口が達者で、その場の空気を変えてしまう力を持っていた。相手が初対面であろうと、古くからの友人のように引きつけてしまう。

同じくマウガもバティストの存在に気付き、世話を焼くようになった。「お前なら俺のことを理解してくれる気がする」——彼はバティストにそう語った。「俺といれば、一緒にてっぺんをとれるぜ」、と。それはバティストにとっても魅力的な話であり、以降、二人は常に行動を共にした。一緒にいれば、どんな現場であろうと怖いものなど何もないと思っていた。

「よく聞け！」

二人の上官であるクエルパ大尉の声が響き渡った。クエルパは兵士たちの間を縫うように進みながら話を続ける。

「プラヤ・カルテルが我々の領土に侵攻してきている。目標は奴らのリーダー、ダニエル・フェルナンデスの搜索および排除だ。情報部が既に奴のセーフハウスを特定した。我々で突入し、奴を回収した後、撤退する。分かったな？」

「了解！」

バティストは部隊員と共に叫んだ。

モンテ・クリスティまでの距離が縮まるにつれ、バティストは言い知れない不安に駆られた。他の隊員は皆、士気にあふれている。上陸と同時に集中を高める準備だってできているはずだが、彼らの笑いにはどこか空虚さが漂っていた。

あるいはそれは、彼の思い過ごしなのかもしれない。このところの任務では厳しい戦いが続き、市民が犠牲となることもあった。そのことがバティストの心を乱していたのだろう。彼がタロンに加わったのは、他に行き場がなかったからに過ぎない。任務に精神的な苦痛を感じてから、彼は引退することを考えていた。

だが同時に、そう上手くはいかないことも理解していた。タロンを離れる時、すなわちそれは、棺桶に入る時である。

輸送機が砂浜に着陸し、鈍い音を立てた。武器を握りしめたバティストの体はその衝撃で大きく揺れ、マウガの巨体にぶつかった。

「異常なし、行け」

グエンの声が耳に届く。

ドアが開き、クエルバ大尉が砂浜に目をやる。その先には小さな漁村があった。辺りは暗く、静まり返っている。家々の窓に明かりは灯っていない。

「行くぞ！」

号令がかかった。

パティストは立ち上がり、その隣にマウガが立つ。

「何を心配してるのか知らねえが、大丈夫さ。任務を果たして撤退し、報酬をいただく。それだけだ」

マウガはパティストにしか聞こえないような声量でそう言い、大人の男ほどもある巨大なマシンガン二挺を軽々と持ち上げた。暗がりのなかで、背中中の冷却タンクが光を放っている。マウガは輸送機中に聞こえる大声でこう言った。

「よっしゃ、お楽しみの時間だぜ！」



「一杯奢るぜ」

マウガはそう言って、カウンター席に座るパティストの右側に腰をおろし、その巨体で彼を押しやった。反対側にはグエンが座り、何の感情も宿らぬ目で静かに二人を眺めている。

「ああ、お前もこれにするか？ うまいぞ」

「何しに来た？」

パティストは静かに言った。そしてそこからの脱出経路を確認した。窓、厨房奥の裏口、そして正面入口。どれも遥か遠くに感じられた。

「そりゃあもちろん、太陽と海風を満喫しに来たのさ」

マウガは自分のシャツを指さした。悍ましく黄色い目をしたオウムがたくさん描かれた、趣味の悪いシャツだ。

「田舎を思い出すねえ。タロン本部はシケたところにあるからな。たまにローマを出るのもいいもんだな」

「お前が本部にいることなど滅多にないだろう」

グエンが冷たく言い放った。

「それに俺たちは観光しに来たわけでも、お喋りしに来たわけでもない」

マウガは肩をすくめた。

「せっかくの出張を精一杯楽しもうってだけじゃねえか。まったく、俺の苦勞が分かるか、パティスト？ 帽子を買ってやったのに、被ろうともしねえ」

グエンは汚物でも見るかのように、カウンターに置かれたパナマ帽を一瞥した。彼の鼻は日に焼け、赤くなっていた。

「ともかくだ」

マウガはその太い腕をパティストの肩に回した。パティストは思わず息を呑む。

「たまたま仕事でこっちに来たんだが、ついでに懐かしい顔を見たくなったってわけさ。お前のことだぜ、パティスト！ 昔みたいに、一緒に酒でも飲みたいんじゃないかと思ってな」

マウガやグエンのすることに“たまたま”など有り得ない。パティストはこの四年間、タロンの目を掻いてぐって来た。彼を見つけ出すのは容易ではなかったはずだ。マウガは独自に調べ、パティストの居場所を突き止めたに違いない。

「要点を言ってくれ」

パティストは鋭く言い放った。

マウガはカウンターの向こうに腕を伸ばし、ラムのボトル一本とグラスを手を取った。幸いなことに、ルフォールは店の奥に消えていた。

「冷たいじゃねえか。モンテ・クリスティ以来の再会だったのによ」

マウガはパティストに視線を向ける。その目は燃えるように熱かった。

モンテ・クリスティ——パティストにその記憶がありありと蘇る…… 叫び声、煙、焼け落ちる家、走り、肺が締め付けられ、焦燥感に襲われ——。

「言われてみれば、久し振りだな」

パティストはカウンターに肘をついて言った。心臓が激しく脈打っている。

「この四年、手紙一つ寄こさない。すげえ傷ついたぜ、俺のハートがよ」

そう言うとマウガは、パティストが動揺するほどの強さで己の胸を叩いた。

「今まで何してたんだ？ 夜遊びか、色男？ それとも世界一周の旅か？ いや、まだ言わなくていい。本部までは長い旅路だからな。そこでじっくり聞かせてくれや」

「ついて行く気はない」

とパティスト。

「断れると思うな」

グエンが鋭利な声で言い放つ。

マウガは溜め息をもらした。

「相変わらず怖いねえ。要するにこいつが言いたいのはな、抗うのはお前の勝手だってことだ。だがそれが何を意味するかは分かるな？ それに、万が一お前の身に何かあったら、あの診療所はどうなる？ もっと広い視野を持たねえとな。お前は、俺たちの仕事に手を貸してくれりゃあいい。そうすれば心配することなど何もない」

パティストの肩に、マウガの腕が重くのしかかった。その重さは小柄な人間ひとりほどはありそうであった。振り払って出口に駆け出そうとすれば、マウガに殴り倒されるのは確実だ。枯れた葉が一枚ずつ落ちていくように、パティストは選択肢を奪われていく。だがどうにかして、この窮地を脱しなければ。

「仕事というのは？」

パティストは尋ねた。

マウガはニンマリと、余裕に満ちた笑みを浮かべた。パティストはその表情に見覚えがあった——勝利を確信した時の顔だ。

「サンクレア製薬は知ってるよな？ お前の診療所も、あそこから薬を買ってんだろ？」



——ハイチ中の医療機関もな、とパティオストは心の中で答える。

「買えるだけの資金的余裕があれば、な」

反対側からグエンがそう告げる。グエンはパティストの方にグラスを寄こした。それは普通の人が行えば親切な行為だろうが、グエンの手からとなると脅迫になる。

「連中は目先のことしか見えていない。確かに市場を独占すれば、好きに値段をつり上げられる。だが限度を超えてしまえば、それを買える客がいなくなる」

マウガはグラスを持ち上げ、二人に乾杯の仕草をしてみせた。

「ヴェルナン・サンクレアは悪党さ。その点は俺たちも同じだが、奴はこのところ妙な動きを見せてる。タロンに払うべきものを払わずにな。欲を出し、お前らや俺たちから金を巻き上げようとしてんだ。だから奴のところへ出向き、誰のおかげでここまでやってこられたのか思い出させてやるのさ」

「魔法の杖でもなければ、ヴェルナン・サンクレアの考えを変えることはできない」——ロズリーヌはそう語っていた。だが診療所は深刻な医薬品不足に陥っている。パティストが魔法の杖になることはできない。だが……。

「少し脅してやればいい」

パティストはゆっくりと言った。

マウガの顔に笑みが浮かぶ。

「お前なら分かってくれると思ってたぜ。そこでよ、こういうのはやっぱ当事者から言ってやるべきだと思わないか？ 事情をよく分かってる奴からな。うまくやれば、奴はお前んとこの診療所に何だっで差し出すさ」

パティストはラムを一口含み、どうするべきか考えた。面識はないものの、サンクレアとパティストは同じポールドペの出身だ。うまくやれば、診療所を救うことができるかもしれない。だが同時に、マウガとグエンが信用ならない相手であることも忘れてはならない。

彼らはパティストが訪れるであろう場所を把握し、こうして待ち受けていたのだ。診療所のことも知られている以上、逃げればロズリーヌたちに危険が及ぶだろう。グエンひとりなら戦って勝てるかもしれないが、マウガは悪魔のような男だ。二人同時に倒すことなど不可能に等しい。





**OVERWATCH®**

**WHAT YOU  
LEFT BEHIND**



バティストは躊躇しながらもグラスを持ち上げ、マウガのグラスに合わせて乾杯した。だがその間も、心は不安に包まれていた。

「ほとんど強制だな。だがそういうことなら引き受ける。で、作戦は？」

グエンは封筒を取り出し、それをバティストの前に押しやった。

「詳細はそこにある。安全を確保してから開けろ。中身を確認したら、燃やして処分するように」  
バティストは手を伸ばしたが、グエンは封筒を押さえた手を離さなかった。二人の視線がぶつかる。

「俺はお前を巻き込むことには反対したんだ、オーギュスタン。信用できる奴が必要だと言ったのに、マウガが聞かなくてな。がっかりさせるなよ」

そう言って彼はようやく手を離し、椅子に深く座りなおした。

バティストは封筒をポケットにしまった。

「で、仕事が済んだ後は？」

それで解散、という訳にはいかないのだろう。タロンを離れるには、棺桶に入るしかないのだから。マウガが微笑み、その腕の重みがバティストの肩に重くのしかかった。

「心配ないさ、相棒」

彼はポケットに手を伸ばし、カウンターに札束を置いた。数えるまでもない。今夜の酒代と、おそらくは翌週まで飲んでいられるほどの有り余る代金だ。

先に席を立ったのはグエンだった。彼は店を出て、影のように闇の中へと消えていった。入口で立ち止まったマウガの巨体が、ぼんやりとしたオレンジ色の光の中に浮かんでいる。垂木から下げられた照明の周りには、蚊がたかっていた。

「それじゃ、また。明日、早朝に」

そう言ってマウガもまた、闇夜に消えていった。



辺りは火の海だった。バティストは炎をかいぐりながら、敵の姿を探していた。視界は最悪だ。町は戦場と化している。煙の中赤いヘルメットを輝かせ、タロンの兵士たちが亡霊のように進む。周りでは建物が次々と焼け落ち、屋根が崩れ落ちていく。聞こえてくるのは銃声と、市民の悲鳴ばかりだった。

出だしは順調だった。上陸した部隊は、プラヤ・カルテルの隠れ家まで難なく辿り着くことができたのだ。しかしフェルナンデスの潜伏場所と思しき部屋に入ると、そこに彼の姿はなかった。

クエルバ大尉は次なる指示を出した——目標が見つかるまで、町を徹底的に破壊せよ。それに従い彼らは家々のドアを蹴破り、今すぐ出ていけと市民に怒鳴り散らした。だがいくら町を破壊しても、見つかるのは恐れおののく一般市民ばかりであった。バティストは、任務が失敗に終わったのだと悟った。苛立ちを募らせた彼はやがて、周辺を搜索すべく外に出た。

するとその時、タロンの航空機が急降下して視界に飛び込み、町を攻撃し始めた。

モンテ・クリスティが砲撃を浴びた。その爆風を受けたバティストは、民家の中へ吹き飛ばされた。破損したヘルメットを外して体を起こすと、そこには瓦礫の下敷きとなった住人たちがいた。バティストはなんとか彼らを救出し、安全な場所へ導こうと表に出た。ところが、先の爆撃により

町はすっかり消し飛んでいた。その光景に立ち尽くすバティストをよそに、助け出した一家は散り散りに逃げていった。

「どうということだ!？」

彼はインカムに向かって叫んだ。

「市民が攻撃に巻き込まれたぞ!」

するとクエルバ大尉からの応答が入った。

「元の位置へ戻れ、オーギュスタン中尉」

「しかし——」

「これはプラヤ・カルテルへの見せしめだ。フェルナンデスを渡さなければどうなるか、奴らに思い知らせてやるためのな」

バティストの視線の先で何かが光った。通りの真ん中で、部隊の仲間たちが略奪品を積み上げていたのだ。金目のものや衣服が積みまれ、市民の家財が箱に詰められている。略奪品を物色し、どれを頂こうかと品定めしている隊員たちもいた。ダブルデイ二等兵が宝石の山に手をうずめ、マッセイがアンティーク硬貨を彼に投げつけている。同じく二等兵のパカノウスキーは両手で掴み取った2000ペソ紙幣を宙に放り、隊員たちの頭上に金の雨を降らせた。彼らは楽し気に笑った。

辺りには焼け焦げる臭いが漂っていた。

バティストの右方で、何かが素早く動いた。彼はすぐさまライフルを構え、動きのあった方向に銃口を向ける。煙のせいでよく見えないが、小さな人影が向かってきていた。

「下がれ!」

バティストは叫び、炎の中を進んだ。

すると人影が立ち止まり、バティストはその正体を見ることができた。ボロボロの服をまとった少女であった。彼女は怒りに満ちた目で、バティストを見上げていた。その手に石を握りしめて。バティストは彼女の目に映る自分の姿を見た——少女の家を破壊した、得体の知れぬ兵士の姿。

バティストは後ずさり、銃口を下げた。そして振り返ると、煙と瓦礫のなかを駆け出していた——背後に叫び声を聞きながら。



ハッと息を呑み、ホテルの一室で目を覚ました。バティストは汗をかいていた。手を伸ばして携帯電話を探し、床に落としそうになりながらも何とかそれを掴み取る。煌々とした画面には午前4時3分とあった。

さきほどの夢が頭から離れない。焼け落ちる町の臭いが鼻をつくようだった。

彼はベッド下から箱を引き出し、蓋を持ち上げた。中には光沢のある白いコンバットアーマー一式と、メディックのシンボルを配したスカーフが入っていた。彼はブーツを並べて置き、その重金属のフレームを手でなぞった。それぞれのブーツには機動性を飛躍的に高める外骨格が装備されている。バティストがブーツの片方をやさしく押してまだ機能するかどうかを確かめると、関節部がきしむような音をあげた。最後にアーマーを使用してからずいぶん経つが、その重みは彼の肩にすぐ馴染んだ。

パティストは素早く身支度を済ませ、武器を肩にかけた。そしてライターを取り出すと、手紙の端に火をつけた。タロンのマークが丸まり、歪んでいく。手紙が灰になると、彼は部屋を後にした。



ヴェルナン・サンクレアの屋敷は美しく広大な土地に建っていた。尖屋根に優美なバルコニーや飾り枠を持つ、地上三階建ての風格漂う建築であった。パティストにとって、その真昼の太陽に照らされたビクトリア朝様式の白い屋敷は、まるでおとぎ話の中から取り出したかのようなだった。

「かつては歴史あるホテルだったらしいな？」

ガイドブックを見ながらマウガが言った。彼は後部座席を陣取り、座席下には二丁の巨大な銃を置いている。車が正面ゲートを目指して進む中、タロンの重たいコンバットアーマーがガチャガチャと音を立てていた。趣味の悪いオウムのシャツは着ていないものの、今日もサングラスをかけている。

「さらにその前は、名のある政治家が住んでたそうだ。ところがそいつの一家は皆、無残な死を遂げたとか。こりゃ呪われてるな」

「任務に集中しろ」

グエンが戒める。こちらは昨晚と同じダークスーツにネクタイといった、隙のない出で立ちである。助手席のパティストは白いコンバットアーマーに身を包み、膝上にヘルメットを置き、グエンの隣に座っている。

「アボは取ってある。サンクレアは我々を待ち構えているはずだ。屋敷に入り、仕事を済ませ、屋敷を出る。それだけだ」

パティストはグエンの方に視線をやった。

「あんたが現場に出るなんて珍しいな」

「時には自分で対処しなければならないこともある」

グエンはゲートの前で車を停めた。センサーにバッジをかざすと、ピーッと音が鳴ってからゲートが開いた。

屋敷へ入ると、パティストは違和感を覚えた。グエンの話ではヴェルナンの警備隊はタロンと民間軍事会社の双方で構成されているとのことだったが、自分たち以外にタロンの姿はない。案内役とグエンが前を歩き、パティストとマウガがその後に続いた。パティストが視線をやると、マウガは微かに頷いた。

案内役が重い扉を開けると、書棚の立ち並ぶ図書室が広がった。中には武装した六人の警備兵が待ち構えていたが、ヴェルナン・サンクレアは見当たらない。

そこでマウガが動き出した。グエンの前に素早く進み出て、エネルギーシールドを展開。パティストが振り返って後方に銃を向けると、扉が勢いよく閉ざされた。警備兵たちも武器を構えるが、先制攻撃を決めたのはグエンだ。彼がサイドアームを抜くと、警備の一人が音もなく床に崩れ落ちた。グエンがそのサイドアームを使うのをパティストが見たのは、これが初めてであった。

それからすぐに敵の攻撃が始まった。マウガのシールドに銃撃が浴びせられる。パティストは正確な狙撃で近くの警備二人を倒した。そのまま身を翻し、シールドを避けて回り込もうとする敵を素早く仕留める。グエンがさらにもう一人を撃ち、そのまま最後の一人に銃を向ける。



「待て、そいつは生かしておこう」

そう言ったマウガに、グエンは頷いた。そして手の角度を少しずらすと、敵の太ももを撃ち抜いた。警備兵は叫び声をあげて床に倒れ込んだ。マウガはシールドを解除すると大股で詰め寄り、男を片手で掴み上げると書棚に押し付けた。

「ご大層な歓迎だ」

そう言ってパティストは銃を下ろした。心臓が高鳴っていた。図書室は惨状と化していた。

「いくらあんたでも、今のは計算外だっただろ？」

グエンは銃をホルスターに収め、淡々とした調子で返した。

「可能性は考慮していた」

だが計画通りに事が進まなかったことに対し、酷く苛立っているのが見て取れた。そんなグエンの姿に、パティストは密かな満足感を得ていた。

「こうならないことを願っていたんだが。ここに配備したタロンの兵たちは、恐らくすでに殺されているのだろう」

「なあ、お前のボスはどこだ？」

マウガは気さくな調子で尋ねた。だが首を掴まれ、壁に押し付けられたままの男は息を詰まらせている。

「悪い、よく聞こえなかった。もう一度言ってくれるか？」

と言って手に力を込め、男の喉をさらに締め付ける。

マウガは明らかに楽しんでいて。時たま、彼の気さくで饒舌な男としてのマスクは剥がれ、その下から殺人鬼の顔が現れる。パティストにはそれが見て取れた。その二面性がマウガをより危険な存在にしている。そして彼がこうなると、止められるのはパティストしかない。

歩み寄り、壁に片手をついて語り掛ける。

「少し加減してやれ。そいつ、何か言おうとしてるんじゃないのか？」

パティストは気軽な調子を保ちつつ、意識をマウガに集中させた。辛抱強さと慎重な言葉選びで彼を鎮めることに成功してきた彼だが、あの頃からもうずいぶんと時間が経つ。おまけにマウガ今、これまでにないほど強かった。

マウガは勢いよく振り返った。その目には暴力的な色が浮かび、危険としか言いようのない顔つきをしている。それを見た瞬間、パティストは思わず恐怖を感じた。すぐにマウガは笑顔を見せ、手の力を緩めた。解放された警備兵が酸素を肺に入れようと喘いだ。

「悪い悪い。で、サンクレアはどこだ？ 俺らが欲しいのはあくまで奴だ」

「最上階の…… オフィス……」

男は絞り出すように言った。

「ありがとよ」

マウガは陽気に告げ、再び手に力を込める。男は石のように動かなくなってカーペットに崩れ落ちた。

「なんだってこういつも決まって最上階なんだ？」



パティストは呟いた。この手の尋問は、マウガと組んでいた頃に数多く経験している。染みついた感覚によって、彼は意識するまでもなく以前の行動パターンを取り戻していた。

「見事だったぜ、パティスト」

マウガはパティストの肩を叩いた。その顔には狡猾さと誇らしさが滲み出ている。

「昔のまんまだ」

——それを恐れていたんだ。警備兵たちが転がる図書室を見やり、パティストは思った。そして自分の銃に視線を落とす。こうもすんなりとかつての自分に戻ってしまうとは。何年もの月日をかけて断ち切ろうとした習慣は、一夜にして元に戻り、さらに強固なものとなってしまったように思えた。マウガの影響か、あるいは、消し去ることのできない自分自身の性がそうさせたのか？

グエンは薄型のデータパッドを取り出し、屋敷の見取り図をホログラムで表示させた。

「戦闘は避けられないな。だが幸い、ルートは簡単だ。メイン階段で上を目指す」

「他に行き方はないのか？」

パティストは見取り図を見ながら尋ねた。

「バルコニーをよじ登る気はない」

とグエン。

「向こうは事前に警戒していた。となれば素早い行動が何より重要だ。できるだけ身を隠して進み、下手にリスクを冒すな」

「分かってるさ」

マウガはそう言って、背中に収めていた巨大な銃を取り出した。

パティストは見取り図をよく観察し、秘密の通路や隠し扉といった変わったものがないか探した。特に怪しい箇所はなかったが、だからと言って気は抜けない。

ヴェルナン・サンクレアのような人間は、自分が助かる術を必ず用意しているものだ。

「どうした、パティスト。何か気になるのか？」

マウガはパティストを見て言った。

パティストは見取り図から目を離し、肩をすくめる。

「いや、大丈夫だ。増援が来る前に進むとしよう」

「よし」

そう言って、グエンはカーペットに横たわる死体をまたぎ、その場を後にした。



彼らは戦闘を繰り広げながらメイン階段を進み、飾り柱や輸入品の石像の間をすり抜けていった。銃弾が飛び交い、手すりが砕け散った。マウガのシールドで身を守りながら、着実に前へ進んでいた。パティストとマウガはかつて共に戦った経験から、流れるような連携を見せた。どれだけのブランクがあらうと、二人の動きはかつての調子を瞬く間に取り戻していた。

「また一緒に戦えて嬉しいぜ」

マウガは銃声の響くなかで声を張り上げた。彼は湧き上がるアドレナリンを味わい、戦闘を心から楽しんでた。パティストもまた、同じ血のたぎりを感じることができた。

「お前が逃げ惑ってる間、こういう機会を何年も逃してきたんだ。お前だってこうして戦いたかっただろ？」

認めたくはないが、懐かしそう気持ちは確かにあった。長年の逃亡を経てもなお、しっかりと来るものがあったのだ。だがそれはタロンに対する気持ちではない。自分の居場所を持ち、信頼できる仲間と行動できることへの懐かしさだ。カリブ海連合に入隊した時も、その後、マウガたちのもとでも、手に入れることができた。パティストが自分自身を肯定するために求めたもの、それは人を助けるということだった。

ところがタロンは違っていた。タロンの任務では魂をすり減らされ、結果として組織を離れるに至ったのだ。その事実を忘れることはできない。

「後ろを警戒しろ！」

パティストは返事の代わりにそう叫び、背後からマウガを狙っていた敵を仕留めた。

「そりゃお前の仕事だろ！」

マウガが笑った。マウガが階段の最上から押し寄せる敵を次々と倒して道を切り開いては、二人は物陰に身をかがめた。マウガはその力を発揮し、荒々しく戦い、留まることを知らない。以前の任務でもそうであったように、嵐の如き勢いで突き進んだ。

マウガはかつて、パティストにこんなことを語った——「お前がついてリゃ、何だってできる。お前はタロンいちのメディックさ。お前が俺を生かし、俺がお前を守る。誰にも止められねえコンビさ」

サンクレアのオフィスは三階の長い廊下を進んだ最奥にあった。廊下の壁には巨大な肖像画が並び、それらが悪意に満ちた目で彼らを見下ろしていた。壁紙の趣味は醜悪だった。

パティストは慎重に前進しながら、マウガに頷いて合図を送った。グエンは反対側の壁に体身を寄せている。マウガがニヤリと笑い、肩から突進して勢いよく扉を破った。

オフィスは他の部屋と同様、豪華な調度品で飾り立てられていた。頭上には巨大なステンドグラスの天窓があり、その下のカーペットに色付きの光を投げかけている。ヴェルナン・サンクレアは机の向こうに立ち、震える手でリボルバーを握りしめていた。深い、バーガンディのスーツにゴールドのアクセサリーがよく似合う、ハンサムな男だ。しかしその顔は青ざめ、すっかり惨めな様相に成り果てている。

「君らの目的は分かっている」

彼はしっかりとした声で告げた。

「私がどう思われているかもな。だが誓って言う。タロンへの忠誠は失っていない」

「そうか。なら証明してくれ」

マウガはそう言って二挺の巨大な銃を構え、シールドを起動した。そしてゆっくりと、狂気めいた薄ら笑いを浮かべた。

サンクレアがリボルバーの引き金を二度引いた。弾はシールドに当たって跳ね返り、地上を見下ろすフランス窓のガラスを粉々に砕いた。

パティストは窓を見てからサンクレアに視線を戻す。

「残念だったな」

と言って首を振った。

続いてグエンがサンクレアに詰め寄った。その間も、マウガがシールドで彼を守っている。

「畏にはめてくれたな。それに、お前の護衛として配備した我々の兵も殺したか」

グエンはサンクレアの手から銃を奪い、それを机に叩きつけた。

「事前にアボまで取ったというのに、我々を愚弄し続けた。そんなお前を生かしておくべき理由があるなら、今すぐ言ってみろ」

「情報を渡す！」

サンクレアはそう叫ぶと、早口にまくしたてた。

「撃つな。ここにあるデータパッドを使ってデータを見せるだけだ」

それから机の上に置かれたデータパッドにゆっくりと手を伸ばした。

バティストはサンクレアに狙いを定めたまま、その動きを銃口で追った。サンクレアは一度りボルバーに目をやったが、それをグエンから奪おうとはしなかった。データパッドを起動し、中のファイルをタップする。地球を模した金色のホログラムが空中に出現し、ゆっくりと回転しはじめた。そして、地球上の各地に明るく光る点がいくつも表示された。回転に合わせ、それらの点に次々とポートレート画像が表示されていく。

——いや、違う。バティストは気づいた。ただのポートレート画像などではない。人物調査資料のデータだ。

そこに聞き慣れない声が再生された。

「エージェント諸君、オーバーウォッチには皆さんが必要なのです。世界は再び、私たちを必要としています。分かりますね？」

「三日前にこのメッセージが届いた」

サンクレアは言った。ホログラムが放つ光が、彼の顔を黄金に照らす。

「オーバーウォッチの元エージェント全員に送られた再召集令だ。何者かがオーバーウォッチを蘇らせようとしている」

「あんた、オーバーウォッチだったのか？」

バティストは驚きを隠せなかった。エージェントに会うのは初めてだ。子供の頃の憧れの存在だったオーバーウォッチ。養護施設ではベッドの上に隊員募集ポスターを貼り、いつか、オーバーウォッチが自分たちを救ってくれると密かに願っていた。そんなオーバーウォッチのエージェントが今、自分の目の前にいる。そしてその男は、自国から利益を搾り取り、命惜しさに彼らを売ろうとしている。

「現場に出たことはない。君のような調整役さ」

サンクレアはそう言って、グエンの方に頷いた。

「オーバーウォッチは私を蔑ろにした。そもそもの始まりから、あの組織は毒に侵されていたんだ。長い時間を過ごすほど、ゆっくりと腐っていくのが見て取れたよ」

「だからその腐敗に加担してやろうと。そう思ったのか？」

パティストは問いただした。完璧な組織など存在しない——それは彼自身がよく理解している。だがオーバーウォッチという組織は、より良き世界を志す組織だ。それまでの世界とは違う、理想を実現するための組織ではなかったのか。

サンクレアは蔑みの目で彼を見た。

「タロンのエージェントにとにかく言われる筋合いはない。だが少なくとも、君らの組織は私の価値を認めてくれた。国連がオーバーウォッチを解体した頃にはもう、君らが何年も忙しく活動できるだけの情報をタロンに流し、私はそれに見合う報酬を受け取っていた」

マウガは満足げな顔でパティストを見た——タロンに集うのは、しょせん金目的か行き場のない奴らだろう？

だがサンクレアは違った。彼には選択肢があったのだ。そのうえでオーバーウォッチが焼け落ちる様を、マッチ片手に見ていたのだ。彼は腕を広げ、豪華に飾られたオフィスを指し示した。

「オーバーウォッチが決して与えなかったものを、タロンは与えてくれた。だから今度は、私がとおきの情報を提供しよう」

グエンは手を伸ばし、ホログラムの地球を回転させた。その動きに合わせ、オーバーウォッチのエージェントの名前とバイタル情報が次々と表示されていく。

「残念だが……」

流れゆくエージェントたちの顔を見ながら、グエンは告げた。

「この程度の情報であれば既に掴んでいる。我々の内部にいる元オーバーウォッチ関係者が、お前ひとりだけだとも思っていたか？」

サンクレアの顔は青ざめた。

「本当の善人なんて奴はいないんだ」

マウガは溜め息をつき、二挺目の銃をしまった。

「言ったとおりだろ、パティスト？」

マウガは以前にもそう言っていた。もしかすると、その言葉は真実なのかもしれない。

サンクレアは一步退き、椅子にぶつかった。狡猾そうな笑みを浮かべたマウガが、パティストの方をちらりと見やる。

「よーし。誰が手を下す？ お前がやるか、相棒？ 俺の見込みが間違っていなかったことを、グエンに証明してくれ」

グエンは片眉を上げ、パティストの反応を伺っている。その場にいる全員が、彼の行動に注目していた。

パティストは机の反対側に回り、サンクレアに歩み寄った。

「お前のしたことは許されない」

そう静かに告げると、ライフルを構え、必死の形相をしたサンクレアの顔に照準を合わせた。命乞いをする彼の声は、誰の耳にも響かなかった。

たった一発の銃弾で、多くの悪を正すことができる。サンクレアはその行いで甚大な被害を生み、助けを必要とする多くの人々を見捨てたのだ。彼のせいで診療所は薬の調達もままならず、適切な治療を

受けられないまま苦しむ人々が増えている。しかし、こいつの頭を撃ち抜いたところで、何が変わるのだろうか？

タロンに所属していた頃からそうだった。パティストには冷酷に人を殺すといったことができなかった。ここで引き金を引けば、捨て去ったはずの自分に戻ってしまうだけでなく、取り返しのつかない一線を越えることになる。

——この一線だけは、絶対に超えてはならない。

パティストはベルトに着けたスタングレナードに手を掛けた。彼の思惑に気付いたグエンが一瞬目を見開いたが、次の瞬間、パティストはそれを投げつけていた。閃光が部屋を包み、轟音と共に爆発が起こる。グエンとマウガが何かを叫んだが、それが何であつたにせよ、全ての音は爆発の轟音にかき消された。

パティストは机の上のデータパッドを掴んでジャケットにしまい込んだ。そしてサンクレアの体を掴み告げた。

「しっかり掴まってろ」

恐怖に喚くサンクレアの言葉を見殺し、そのままエグゾーツの外骨格を起動する。フレームが変形し、跳び上がったパティストとサンクレアの体を上昇させて天井のステンドグラスを目指す。パティストは腕を上げて顔をかばった。

そこに銃声が鳴り響き、左腕に激痛が走った。思わずサンクレアを離しそうになる。誰が撃ったのかは、確認するまでもない。左腕で済んだだけでも幸運だ。パティストとサンクレアは天窓を突き破り、屋根の上に着地した。タイルの上に色とりどりのガラスが降り注ぐ。屋敷の背後には木々の立ち並ぶ一帯が広がっており、逃げ込むにはうってつけのように見えた。

落ち着いている時間はない。パティストはサンクレアをしっかりと掴み、屋根から林の方へ跳び上がった。次の瞬間、銃撃を浴びた屋根が無残に砕け散った。パティストは枝にぶつかりながら落下し、木々の中腹に降り立った。サンクレアが何かを言おうとしていたが、パティストはそれを手で制して囁いた。

「喋るな」

サンクレアは目を大きく見開き、頷いた。パティストは慎重に向き直した。

大きな窓の前に立ち、マウガが林に目を走らせている。窓ガラスは全て、彼の巨大な銃で吹き飛ばされていた。

「パティスト、話をしよう」

マウガは呼びかけた。その目は、パティストたちの隠れている辺りに留まっている。パティストは息を殺し、視線が逸れるのを待った。それはとても長い時間に感じられた。

そこにグエンが近づき何かを叫んだが、パティストには聞き取れなかった。その表情は怒りに歪んでいる。少しの間マウガと視線を交わすと、グエンは銃をしまって視界の外に消えていった。

「こんなことしても、お前の立場が悪くなるだけだぜ」

マウガは窓の外へと言い放った。彼が窓に背を向けると、パティストは木を降り始め、その後にサンクレアが続いた。



煙を吸い込んだせいで、バティストの肺に痛みが走った。釣り舟の端で身をかがめ、係留ロープを解く。ドックは静かだった。遠い炎のゆらめきが水面に反射し、オレンジ色に輝いていた。

「まさかもう帰る気じゃねえよな」

馴染みのある声にバティストは凍り付く。

「面白くなるのはここからだぜ」

ドックの反対側にマウガが立っていた。ヘルメットは外している。そのアーマーは焼け焦げ、銃弾でへこんでいた。すすけて黒くなった顔が笑みを浮かべ、白い歯が際立つ。そして燃え上がるモンテ・クリスティを背に、両手の銃をバティストに向けた。

バティストはゆっくりと立ち上がった。

「俺は戻らない。クエルバは、市民を巻き込むようなことはないと言っていた」

マウガは首を振った。

「それをそのまま信じたのか？ 周りをよく見ろ、バティスト。これが俺たちの仕事だ」

そう言って彼は両手を広げる。

「マカティでの任務を忘れたのか？ シンガポールは？ みんな似たようなモンだったろ」

「クエルバは大義があつてのことだと言っていたんだ」

バティストは弱々しく告げた。だが本当は、それが真実でないと分かっていた。ただ信じたくなかったのだ。マウガの表情を見れば、彼も気付いていたであろうことが見て取れる。

「そりゃクエルバはそう言う。そしてそんなのは当然嘘さ。だから何だ？ 今さら引き返せねえんだよ、バティスト」

この時だけは、彼も虚勢を捨て本心で語っていた。誰に見られることもなく、ただ二人だけが水辺に立っていた。そして静寂の中、彼は告げた。

「善人なんて奴はいないんだよ。お前も、俺も、そんなモンにはなれねえんだよ。俺たちは限られた時間で、ただ楽しむしかないのさ」

楽しかったことなど一度もない。人を殺し、略奪を働くことでバティストが感じたのは、吐き気を催す恐怖だけだった。



マウガはパティストの方へと歩み寄って来る。パティストが銃を抜き構えると、彼はそこで足を止めた。

「俺は戻らない」

パティストは繰り返す。

「戻るぐらいなら、ここで死ぬ」

どちらも言葉を発しないまま、長い時間が流れた。聞こえてくるのは波の音と、微かに聞こえるパチパチという炎の音のみ。ふと、パティストのインカムが音声を受信した。首を傾けているところを見ると、マウガも同じ音声を聞いているようだった。

「オーギュスタン中尉、応答しろ！」

クエルバ大尉の声だった。

「マウガ、奴は見つかったか？」

パティストの鼓動が速くなった。マウガを撃ちたくはなかった。だがこの場を切り抜けたとしても、部隊全員とやり合うのは非現実的であった。マウガに居場所を話されたら最後、殺されるのは間違いない。

マウガは目をそらさずにパティストを見つめ続けた。そしてインカムに手を伸ばす。

「こちらには見当たらない。これより帰還する」

マウガはゆっくりと告げた。

「了解した」

クエルバが応答し、交信は終了した。

マウガは構えていた武器を下ろした。

「お前が撃たないのは分かったよ、パティスト。そっちも武器を下ろせ」

だがパティストは銃を下ろさなかった。

「どういうつもりだ？」

そう問いかけると、マウガは肩をすくめた。

「お前のことが好きなんだよ。お前には何か、人と違うものがある。それに、お前みてえな重たい野郎を引きずってくのはご免だからな」

そしてマウガは伸びをして言った。

「ほら、行けよ。でもいいか？ こいつは貸しだぞ。帰って来る気になったら、俺に連絡しろ」

パティストはマウガを視界に入れたまま後ろに下がった。宣言したとおり、マウガは彼を止めようとはしなかった。パティストは「ありがとう」と小さく告げた。それがマウガの耳に届いたかは分からない。確かめることもしなかった。パティストはそのままモーターを起動すると、水辺に立つマウガを残してドックを後にした。



埠頭に到着する頃には、追っ手の姿は見えなくなっていた。サンクレアの警備隊にはパティストほど土地勘がなく、それはマウガやグエンも同様だった。サンクレアも、この窮地を脱するにはパティストに頼るしかないという悟り、彼に抵抗することはなくなっていた。

パティストは倉庫の一つに入り込み、サンクレアもよろめきながら彼の後に続いた。グエンに撃たれた肩が痛んだ。だが、スカーフを使った応急処置でこれを凌いでいた。パティストたちはコーヒー豆やマンゴーの箱が積み上げられた中を進み、やがて倉庫奥の青いバレルの前に辿り着いた。彼はその蓋を外し、中からバッグを取り出した。今朝、マウガたちと合流する前にあらかじめ隠しておいたものだ。

パティストは大きな輸送コンテナの裏にサンクレアを隠れさせ、水のボトルを手に取った。

「取引といこう」

近くの箱に片足を乗せてパティストは言った。

「数時間後、事態が収束したら助けをよこしてやる。あんたが町から脱出できるようになる。その代わりに、国中の診療所に必要な物資を無料で提供しろ。どうだ？」

サンクレアは顔面蒼白で、彼の言葉が全く耳に入っていないようだった。突如として命の危機に直面すると、人はこういう状態になるものだ——とパティストは冷静に考える。

パティストが顔の前で指を鳴らすと、サンクレアは我に返った。

「おい、聞いてるのか？」

サンクレアはようやく口を開いた。

「なんだってくれてやる。生きてここを出られるならな」

パティストは肩をすくめた。

「それはあんた次第だ。あんたが約束を守る男だと信じたいが、もしおかしな真似をするようならタロンに居場所を知らせるぞ」

立ち去ろうとするパティストに、サンクレアは問いかけた。

「なぜ私を殺さなかった？」

パティストは足を止める。

「殺す価値もないからだ」

そう言い捨てて、彼は倉庫を後にした。

埠頭には無数の漁船が停泊し、ゆったりと波に揺られていた。近くには積み込まれる前の貨物クレートが積み上げられている。パティストは個人所有の船が並ぶ方に向かい、フュージョンエネルギーの充電ステーションの列から、一番端のものを選んだ。船は水面の少し上に浮かび、ブーンと低い音を発している。

「どこかで見たような光景だな」

背後から声がして、マウガが棧橋を歩いて近づいてきた。アーマーに陽の光を受けながら、巨大な銃を両手に軽々と抱えている。その声にはある種の昂りが感じられた。パティストにはそれが戦闘後の興奮状態を示すものと分かる。

「一度は見逃してやったが、今回も同じようには行かねえぞ」

パティストは彼を見つめた。自分自身の体が緊張と警戒で震えるのを感じる。

「グエンはどこだ？」

その問いかけにマウガは肩をすくめた。

「さあな。屋敷で後始末に追われてるんじゃないかねえか？ 相変わらず不満だらけって表情をしてやがる。いつかそんな顔のまま元に戻らなくなっちゃうぞって注意してんだけどな」

マウガが銃を上げた瞬間、バティストは物陰に跳び込んだ。コンクリートに銃弾が浴びせられ、周囲のクレートが粉々に砕け散る。輸送コンテナの背後にしゃがみ込んだバティストに、撃ち抜かれたマンガの汁が降り注いだ。

バティストはライフルをぐっと握りしめる。マウガは本気らしい。

「俺を生け捕りにするんじゃないのか？」

「そのつもりだぜ」

マウガの声は燃えるように荒々しい。

「だがその前に説得だ。今ならまだ間に合うぞ」

「お前からそんな言葉が出るとはな」

バティストは輸送コンテナの裏から向こう側を覗こうとするが、すぐさま銃弾を浴びせられ首を引っ込めた。胸の鼓動がドクドクと鳴り響く中、残弾を確認する。こちらの弾はマウガよりも遥かに少ないだろう。

「そういえば。クエルバ大尉たちのこと聞いたぜ。まったく残念だよ」

マウガは叫んだ。栈橋を進みこちらに近づいてくる足音が聞こえる。

彼らの元部隊員たちはバティストの後を追い、一人ずつ順に襲い掛かるという致命的な作戦ミスを行ったのだ。そして最後に残ったのがクエルバだった。

「本当にそう思ってるのか？」

バティストは息を荒げ、コンテナに背中を押し付ける。

そこにマウガのリロード音が響き、彼の銃に新たな弾帯が装着される。

「いいや。気に食わない奴だったからな」

さらなる銃撃によってバティストの近くのコンクリートが撃ち抜かれ、周囲に葉きょうがバラバラと落ちた。ここから船にたどり着くのは不可能だ。サンクレアの警備隊もじきに到着すると考えれば、時間はもう残されていない。

そこで、バティストは背中に丸く平らな物体があるのを感じ、バッグを肩に回した。あることに気付いたバティストは、バッグからディスク状のデバイスを取り出した。それはここ数ヶ月開発に取り組んできたものだが、まだ試作品にすぎない。だが、これならあるいは……。

「撃つな！」

バティストは叫んだ。

「今、そっちに行く！」

彼はマウガに見えるよう腕を突き出し、恐る恐る様子を窺った。銃撃が止んだのを確認し、輸送コンテナの陰からゆっくりと出た。

数メートル先で、サングラスをかけたマウガが待ち構えていた。両手の武器は真っすぐバティストを狙ったままだ。海の風が髪を揺らすなか、彼はニヤリと笑った。

「ようやく分かったか、相棒？」

「いや、そうでもない」

そう言ってバティストは、コンテナの背後からライフルを素早く取り出した。さらにディスク状のデバイスを宙に放り、マウガのそばの充電ステーションに弾を撃ち込んだ。

たちまち爆発が起こった。栈橋の中央部分が吹き飛び、辺りにコンクリートの破片が降り注いだ。甲板に破片を受けた船が転覆していく。上空ではカモメが一斉に飛び立ち、金切り声をあげた。

やがて煙が晴れると、マウガの姿は消えていた。パティストは栈橋の端に倒れ込んでいたものの、かろうじて生きていた。空中には先ほどの試作デバイスが浮かび、エネルギーフィールドの盾を彼の周囲に展開していた。彼はそのおかげで一命を取り留めたのだ。

「使えるな」

パティストは息を切らせながらデバイス上部のボタンを押した。装置が停止し、エネルギーフィールドが消失する。そしてディスクを回収すると、足を引きずりながら転覆を免れた船の一つに向かった。栈橋の反対側に停泊している豪華なクルーザーだ。船尾部分には太い筆記体で“サンクレア”と書かれていた。

ローブを切り充電用コードを引き抜き、エンジンを起動する。キーを使わずにエンジンをかける術は心得ていた。クルーザーを発進させながら、パティストは背後を振り返った。埠頭にマウガの姿はなく、傭兵も見当たらなかった。

「バケーションもここまでだ」

彼はそう呟き、クルーザーを操縦して埠頭を後にした。



ポールドペから一時間というところまで来て、パティストはようやく気を落ち着けることができた。クルーザーは低いモーター音を響かせながら進んでいく。周囲にはどこまでも続く青い海が広がっていた。潮風が自由の香りを運んでくる。

パティストはコンバットアーマーを脱ぎ、バッグから医療キットを取り出した。満身創痍ではあるが、命に別状はない。

「まだまだイケるな」

キットを探り縫合糸を取り出しながら、ひとり呟いた。

「マカティの時と同じだ」

サンクレアの冷蔵庫を漁っていると、携帯電話が振動していることに気付いた。驚いて確認すると、携帯が電波を受信していた。パティストは腰を下ろし、ロズリーヌに何を言うべきか思案した。彼女はいずれ、サンクレアの身に起きたことを知るだろう。彼女に伝えたいことは山ほどあったが、そこには危険が伴った。タロンはきっと、パティストの居場所を突き止めようと彼女の通信を監視しているはずだ。帰るタイミングや行き先などは話せない。

考えた結果、彼はメッセージを打ち込んで送信した。

ロズリーヌ。ドックの倉庫にサンクレアを置いてきた。奴は脱出に協力すれば診療所に医薬品を提供すると約束した。人を送り込んで取引してくれ。もし奴がおかしな真似をするようなら、“約束を忘れるな”と念を押してやれ。

少しためらった後に、パティストはもう一通メッセージを送った。

くれぐれも、気を付けて。

タロンが彼女や他の人たちを狙わなければいいが……。バティストは燃え盛るモンテ・クリスティの悪夢を脳裏から振り払った。大丈夫だ。奴らはきっと、診療所を監視下に置いて様子を見る。いつか俺が戻ると踏んで、その時を待つはずだ。となれば、あそこに戻ることはできるのはずっと先になるだろう。

バティストは栈橋での爆発とマウガのことを考えていた。あいつのことだ、そう簡単に死ぬとは思えない。愚かな考えかもしれないが、それでもバティストは、マウガに生きていてほしいと心の中で願っていた。

バティストはサンクレアのデータパッドを起動した。黄金のホログラムが現れ、オーバーウォッチのエージェントたちのプロフィールが表示されていく。彼らの本名、コールサイン、バイタル情報。ホログラムの地球を指で回転させながら、各ファイルを確認した。すると、中東地域で見覚えのある顔を発見した。ベネズエラの人道支援活動で出会った、金髪の女性だ。彼が移動を迫られるまでの一週間、一緒に仕事をしたことがある。彼女の冷静な立ち振る舞いと堂々とした態度は、ロズリーヌにどこか通じるものがあった。資料にはこう書かれている——マーシー、エージェントID：3945\_46。本名：Dr. アンジェラ・ジグラー。ステータス：退役済。

バティストは隊員募集ポスターのマーシーを思い出していた。しかし、黄金の翼を広げて戦場を舞う彼女の姿は、簡易診療所のテントで汗を流し、苦しむ人々に手を差し伸べるジグラー博士とはまるで別人のようだった。もし彼女がオーバーウォッチの元エージェントなのであれば、彼女も再召集令を受け取っているはずだ。

バティストは地図上で彼女が最後に消息を絶った位置を示す光の点をタップした。オーバーウォッチは消滅したものと思っていたが、そうではないのかもしれない。タロンがジグラー博士を狙っているのだとしたら、知らせなければ。彼女の追跡には助けが要るだろう。だが幸い、彼には頼る当てがあった。

バティストは携帯の暗号化されたアプリを起動してパスワードを入力し、画面下部のコールボタンを押した。呼び出し音が二回鳴ったところで、馴染みのある声が応答する。

「あら、久しぶり」

「やあ、ソンプラ」

彼はジグラー博士のプロフィールを見ながら言った。

「頼みを聞いてくれないか？」

+

完









**BLIZZARD**<sup>®</sup>  
ENTERTAINMENT

© 2019 Blizzard Entertainment, Inc.  
ここで使用されるすべての商標は、各所有者に帰属します。